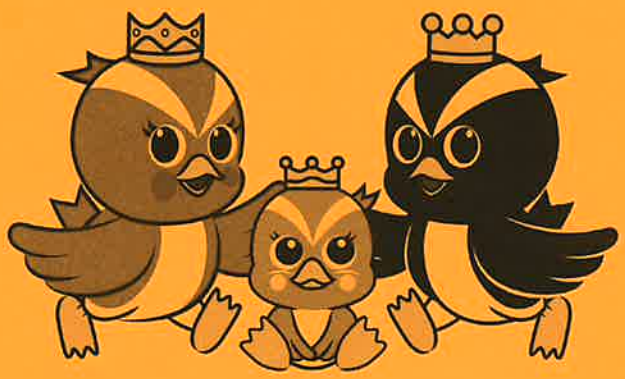
令和６年度

門川町立小・中学校児童生徒

第四十二回読書感想文コンクール

入選作品集



門川町教育委員会

まえがき

連日、記録的な猛暑日が続いた夏も過ぎ、ようやくすごしやすい季節となりました。今年は元日の能登半島地震をはじめ台風や大雨など、自然災害による被害が全国各地で発生しました。八月の台風一〇号では、宮崎市や門川町も竜巻被害を受け、いつ、どこで災害が発生してもおかしくない状況にあります。こうした厳しい環境下にあっても、学校や家庭、地域の皆様方のご理解とご協力のおかげで、子どもたちが、のびのびと学習に取り組むことができておりますことに感謝申し上げます。

そして、今年も第四十二回「読書感想文コンクール」が実施できたことを大変嬉しく思います。

さて、本コンクールの応募数を見てみますと、八百三十五点の作品が集まり、これは実に町内児童生徒の約六割が応募してくれたことになります。このことは、学校と家庭による読書活動の推進の成果であると実感しております。

本紙においては、応募作品の中から、審査によって入選した児童生徒の作品をご紹介します。作品を読んでみますと、作者が本に込めた想いや登場人物の心情を豊かに読み取るとともに、自分の生き方を見つめ考える素晴らしい作品が多数ありました。児童生徒がテーマにした内容をいくつか紹介しますと、「家族愛」、「仕事の大切さ」、「生きること」、「日常の幸せ」、「命の尊さ」、「平和への願い」等、まさにこれからの社会で求められる大切な生き方について考えるテーマを取り上げて、素晴らしい作品に仕上がっていました。

これから、季節が秋から冬へと向かいます。夕暮れ時が刻々と早まるこの時期は、読書を楽しむにはとてもよい季節と言われます。本の中では世界中を自由に駆け回ったり、たくさんの人々と出会い、色々な生き方や考え方に触れたりすることができます。この時期に、家族でたくさんの本に触れてみてはいかがでしょうか。

なお、門川町には、各学校の図書担当の先生方が中心となって選んだ「門川の子どもたちに読ませたい図書百冊」（バージョンⅠ・Ⅱ、全二百冊）があります。先生方のお薦めの本をぜひ手に取って、一冊でも多く本との出会いを楽しんでもらいたいと思います。

結びに、「読書感想文コンクール」の実施にあたり、児童生徒への指導並びに審査等に携わっていただきました各学校の先生方、そしてご協力をいただきました保護者や、関係者の皆様方に厚くお礼を申し上げます。

令和六年十一月

門川町教育委員会　教育長　金子文雄

読書感想文発表会のうつりかわり…

回数	年　月　日	名　　称	参加者数	対　象　者	備　考
1	59. 1.下旬	童　話　発　表　会	16	門小児童	
2	60. 1.27	童　話　発　表　会	26	門小･五十鈴小児童	
3	61. 2. 2	童　話　発　表　会	29	門小･五十鈴小･草小児童	
4	62. 1.25	童　話　発　表　会	38	町内全小学生	
5	63. 2. 7	童　話　発　表　会	37	町内全小学生	
6	元. 2.19	童　話　発　表　会	36	町内全小学生	
7	2. 2. 4	童　話　発　表　会	37	町内全小学生	
8	3. 2. 3	童　話　発　表　会	37	町内全小学生	
9	4. 2. 9	童　話　発　表　会	36	町内全小学生	
10	5. 2.14	童　話　発　表　会	34	町内全小学生	
11	6. 2.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数199 24	町内全小・中学生 入選者	総合評価
12	6.10.30	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数222 16	町内全小・中学生 入選者	総合評価
13	7.10.29	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数122 18	町内全小・中学生 入選者	総合評価
14	8.10.27	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数137 18	町内全小・中学生 入選者	作文評価
15	9.10.19	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数151 19	町内全小・中学生 入選者	作文評価
16	10.10.25	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数152 18	町内全小・中学生 入選者	作文評価
17	11.10.24	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数139 18	町内全小・中学生 入選者	作文評価
18	12.10.22	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数124 17	町内全小・中学生 入選者	作文評価
19	13.10.28	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数117 18	町内全小・中学生 入選者	作文評価
20	14.10.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数109 18	町内全小・中学生 入選者	作文評価
21	15.10.25	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数141 9	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
22	16.10.23	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数150 9	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
23	17.10.22	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数135 9	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
24	18.10.21	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数122 9	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
25	19.10.27	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数119 9	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
26	20.10.25	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数80 9	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
27	21.11.14	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数84 8	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
28	22.10.16	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数78 8	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
29	23.10.22	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数77 8	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
30	24.10.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数78 8	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
31	25.10.19	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数65 8	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
32	26.10.18	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数59 8	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
33	27.10.17	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数54 9	町内全小･中学生 町制施行80周年記念特別賞・ 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
34	28.10.15	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数55 8	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
35	29.10.21	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数47 8	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
36	30.10.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数53 8	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
37	元.10.19	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数55 8	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
38	2.10.17	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数48 8	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
39	3.10.16	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数50 8	町内全小･中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
40	4.10.15	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数44 4	町内全小･中学生 最優秀賞受賞者	作文評価
41	5.10.14	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数55 4	町内全小･中学生 最優秀賞受賞者	作文評価
42	6.11.17	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数45 7	町内全小･中学生 最優秀賞受賞者	作文評価

もくじ

まえがき …… 1

読書感想文発表会のうつりかわり …… 2

小学校低学年の部

一年生最優秀賞　あにゅうはかっこいい　草川小学校　一年　髙橋　二愛　6

二年生最優秀賞　「よるのあいだに・・」を読んで　門川小学校　二年　合場　健　7

優秀賞　やまねこが教えてくれたこと　五十鈴小学校　二年　黒田　凛　8

優良賞　どうやってできるの？チョコレート　門川小学校　一年　日髙　杏美　9

優良賞　おいしそうないえ　五十鈴小学校　一年　松永　望愛　10

小学校中学年の部

三年生最優秀賞　うみといきる　草川小学校　三年　土井　柑奈　11

四年生最優秀賞　戦争を知らないぼくら　五十鈴小学校　四年　長友　護　13

優秀賞　最後だとわかっていたなら　五十鈴小学校　四年　松本　瑛奈　14

優良賞　「ライバルおれたちの真剣勝負」を読んで　門川小学校　三年　岩佐　旭　15

優良賞　「字のないはがき」を読んで　五十鈴小学校　三年　大野　由依　17

小学校高学年の部

五年生最優秀賞　私もりんごの木を植える　門川小学校　五年　黒木　恋華　18
六年生最優秀賞　自然と共に生きる社会へ　草川小学校　六年　田吹　莉央　20
優秀賞　つなみてんでんこ　五十鈴小学校　六年　黒木　愛　22
優良賞　毒に対する考え　五十鈴小学校　五年　當瀬　司穏　24
優良賞　「こどもＳＤＧｓ」を読んで　門川小学校　六年　長谷川　晴一　25

中学校の部

最優秀賞　今、未来を変えるために　門川中学校　二年　水永　央華　28
優秀賞　生きること　門川中学校　三年　山内　心陽　29
優良賞　毎日の幸せ　門川中学校　三年　河野　柚花　31
優良賞　恐ろしい魔女の正体は　門川中学校　三年　松田　優那　33

読書感想文コンクール佳作受賞者一覧　……　35
読書感想文コンクール審査委員一覧　……　35
あとがき　……　36

小学校の部

低学年

中学年

高学年

小学校一年生の部　最優秀賞

あにゅうはかっこいい

草川小学校　一年　髙橋（たかはし）　二愛（ふあ）

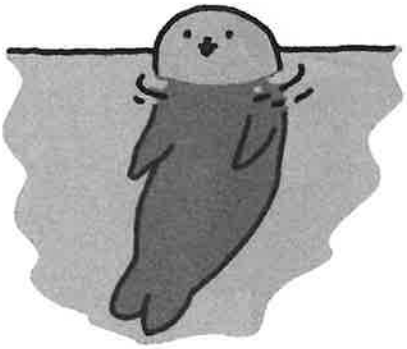
わたしが、このほんをえらんだりゆうは、アザラシのあかちゃんのえがかわいくて、どんなおはなしかきになったからです。

このおはなしは、アザラシのあかちゃんがうまれてにしゅうかんでおかあさんとはなれ、いきていくおはなしです。あかちゃんのなまえはあにゅうです。わたしは、おかあさんがほっきょくへあにゅうをおいていってしまうところで、なみだがでました。かわいそうだとおもったからです。ひとりはさみしいし、こわいです。わたしがなくと、ままはそばにきてなきやませてくれます。あにゅうがないてもだれもこないのでしんぱいでした。

あにゅうは、ひとりでえびをとってたべたり、うみにもぐって、いろいろなさかなたちをみたりしました。ひとりなのにゆうきがあるとおもいます。

あにゅうは、しゃちにたべられそうになります。でも、こおりにしがみつき、たすかりました。つよいなぁとおもいました。

わたしも、このなつやすみに、いろんなことにちょうせんしています。おこめあらいをしたときは、おこめをたくさんこぼしました。おふろそうじをしたときは、おふろがあわだらけで、ふくがびしょぬれになりました。おふろのせんをしめずにおゆをいれて、からっぽのひもありました。ぽすとにてがみをとりにいったときは、もちきれずにおちたり、かぜでとんでいったりしました。でも、やればできるとおもってやるうちにできるようになりました。がんばることはだいじとおもいます。えほんのあにゅうはかっこいいとおもいます。わたしもかっこよくなりたいです。やったことがなくても、れんしゅうをたくさんして、がんばりたいです。やればできる。



（読んだ本・「アザラシのアニュー」）

小学校二年生の部　最優秀賞

「よるのあいだに…」を読んで

門川小学校　二年　合場（あいば）　健（たける）

ぼくがこの本を読もうとおもったきっかけは、ぼくは夜は全ての人がねむってると思っていたからです。ぼくがねむったあとのよのなかでは、どんなことがおこっているのだろうと、きょうみをもったからです。

「よるのあいだに…」には、みんながねむった夜のあいだにしごとをしている人が出てきます。

けいさつかんは、みんなが安全にくらせるようにパトロールをして、ひつようがあればパトカーでどこへでも行きます。

パンやさんは、朝ごはんを買いにきた人にできたてのパンを出せるように、夜の間に小むぎこやたまごをし入れて作っています。

ビルのそうじの人、どうろやせんろのこうじをする人、ものをはいたつする人などは、人が少ない夜の間の方がしごとがしやすいそうです。

みんながだれかのために夜の間はたらいてくれていて、この人たちがいてくれるからぼくたちの毎日の生活が安全でくらしやすくなっているんだなと思いました。

ぼくのおばあちゃんもしょうがいしゃかいごホームでやきんのしごとをしています。一人ではうまく歩くことができない人が夜トイレに行きたいときは付きそって、ほかにもこまっていることがないか夜の間中、見守っているそうです。

ぼくはこの本に出てくる夜バスのうんてん手をしているお母さんの子どもが言っていたことばをまねして、朝、おばあちゃんがかえってきたときに、「いつもありがとう。」と、言ってみました。おばあちゃんは一しゅんびっくりした顔をして、そのあとニッコリわらって「おはよう、ありがとう。」と、言ってくれました。

ぼくは、夜の間ねているけど、おきてるときにはだれかの手助けになるようなことをしていきたいと思いました。

（読んだ本・「よるのあいだに・・・」）

小学校低学年の部　優秀賞

やまねこが教えてくれたこと

五十鈴小学校　二年　黒田（くろだ）　凛（りん）

わたしは、『やまねこのこんにちは』という本を読みました。この本を、えらんだりゆうは、だい名がおもしろそうだなと思ったからです。

わたしが、お話の中ですきなところは、やまねこが、ほかのどうぶつたちと友だちになろうとがんばっているところです。すきなりゆうは、友だちになりたいけど、はずかしがりやのやまねこが、じぶんとにているとかんじたからです。

わたしは、「友だちになりたい」「話しかけたい」と思っていても、なかなか自分から声をかけることができません。たとえば、遠足でおべんとうを食べるとき、「いっしょに食べよう。」と、言いたいのにはずかしくて、じぶんから声をかけられなかったことがあります。そのとき、声をかけられるのをまつだけはなく、じぶんから声をかければよかったとこうかいしました。やまねこは、れんしゅうどおりのあいさつはできなかったけど、じぶんから友だちになろうとあいさつをしていたので、すごいと思いました。だから、わたしもやまねこのようにじぶんから話しかけられるようにがんばりたいです。

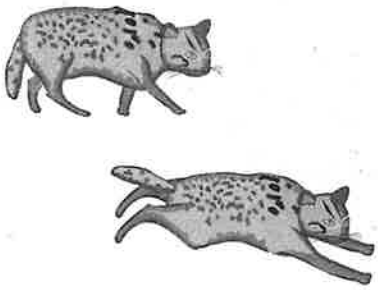
つぎに、心にのこったばめんは、みんなへのあいさつを考えるときに、やまねこが、うわさどおりのやまねこになろうとがんばっていたところです。わたしも、はじめて会う友だちに、よく見られたいと思うので、みんなにすかれたいと一生けんめいせのびしているやまねこは、じぶんとにているなと思いました。

やまねこは、みんなと友だちになろうと一生けんめいがんばったけど、れんしゅうどおりのあいさつはできませんでした。しかし、さいごのばめんでは、あいさつにしっぱいしても友だちとなかよくあそぶことができていました。せのびをせず、ありのままのじぶんがやっぱり一ばんなんだなと思いました。

これからは、じぶんから声をかけたり、すなおな気もちをつたえたりして、ありのままのわたしを大

切にしていきたいです。

（読んだ本・「やまねこのこんにちは」）



小学校低学年の部　優良賞

どうやってできるの？チョコレート

門川小学校　一年　日髙（ひだか）　杏美（あみ）

わたしのしっているチョコは、いたチョコやなまチョコなどです。わたしはあまいチョコがだいすきです。ほんのひょうしをみたとき、たくさんのチョコのしゃしんがならんでいておいしそうだったので、このほんをえらびました。

チョコレートのげんりょうはカカオです。にしアフリカなどあついところでとれます。ほんにカカオのほんとうのおおきさのしゃしんがありました。カカオのみはちゃいろだったので、わたしはあついところでとれるからひやけしたのかなとおもいました。

しゃしんとわたしのてをあわせると、カカオのほうがおおきくておどろきました。みのなかにはたねがびっしりはいっていて、なっとうみたいにねばねばしたしろいかわがついていました。たねのことをカカオまめというそうです。

わたしはこれがチョコレートになるのをそうぞうできませんでした。たねはたいようのひかりでかわかしてからふくろにつめて、がいこくからにほんにふねではこばれてきます。そのあとこうじょうできれいなまめをえらんでひであぶり、いくつかのまめをわってにおいをたしかめます。まめはなかみとかわにわけられて、なかみだけをきかいでなめらかにしていきます。いちじかんまぜるとねっとりしてきますが、まだつぶがみえます。とちゅうでさとうをいれてゆっくりかきまぜ、なんどもあじみをします。どんなあじがするのか、わたしもたべてみたいとおもいました。みっかかんかきまぜるとつぶがきえて、

わたしがしっているチョコレートにちかづきました。さいごは、かたにながしてれいぞうこでひやします。しっかりかたまったら、やっといたチョコのかんせいです。

わたしは、チョコレートがこんなにじかんをかけてつくられるものだとおもいませんでした。ほんをよんでからチョコをたべてみたら、いままでよりもっとあまくておいしくかんじました。わたしのまわりにはたくさんのたべものがあります。いつもたべているものはどこからきたのかな、どうやってつくられたのかなと、ほかのたべものもしらべてみたいとおもいました。

（読んだ本・「どうやってできるの？チョコレート」）

小学校低学年の部　優良賞

おいしそうないえ

五十鈴小学校　一年　松永（まつなが）　望愛（のあ）

としょしつでこのほんをみたとき、ひょうしのえがかわいくて、ひみつのたからものは、なにかなと、きになりました。だから、わたしは、なつやすみにかりるほんにきめました。

このほんは、ポコポコがおめかしをして、おさんぽにでかけるおはなしです。そして、たくさんの小さなどうぶつたちのいえをみつけます。

わたしが、このおはなしのなかですきなところは、タヌキさんがすんでいるおりがみのいえをみつけて、ポコポコとタヌキさんがおりがみでかぶとをおったところです。どうしてすきかというと、タヌキさんのいえは、いろいろなおりがみでたくさんかざりをつけていて、きれいでかわいいいえだったからです。

こころにのこったところは、うえきばちのいえで、むしさんたちのひみつのおちゃかいに、しょうたいさ

れて、みんなで、ホットケーキをたべたところです。いえのおくじょうにあるホットケーキは、とてもおおきくてふわふわしていて、バターとシロップがかかっていて、おいしそうだからです。そして、ホットケーキをたべるむしさんたちは、しあわせそうでした。

わたしは、このほんをよんで、おはなしにでてきたような、つみ木のめいろで、ひみつのぼうけんをしてみたいとおもいました。つみ木のいえには、たからばこがあって、そのなかから、おもちゃが、「ばぁー。」と、でてきたら、こわくてどきどきするからです。そして、もしわたしが小さなどうぶつだったら、おかしのいえをつくってみたいとおもいました。グミやチョコレートをつかっていえをつくりたいです。わたしの大すきなおやつでいえができたら、おともだちをみんなよんで、おやつパーティーをしてみたいです。

（読んだ本・「ちいさなちいさなひみつのたから」）

小学校三年生の部　最優秀賞

うみといきる

草川小学校　三年　土井（どい）　柑奈（かんな）

タカシの小学校のいつもにこにこしてやさしい校長先生が、しんけんな顔で話してくれました。

「うみの下で大きなじしんがおこるとうみのそこがうごくんだ。つなみというのはとてもつよい力をもった水のかたまりのことだよ。つなみは、ものすごいはやさでやってきて、おとなはもちろん、木ぎもたてものも、ながしてしまうんだ。二どとあんなことはあってはならない。だから、みなさんにつたえます。うみのそばにくらすということは、そういうきけんをせおっているということなんだ。じしんがおこったら、すぐにうみからはなれる。たかいところにひなんすることがたいせつなんです。」

私の住んでいる家も、通っている小学校も海のすぐ近くにあります。だから、ひなんくんれんの時や登下校の時は、地しんが起きたら高いところにひな

んするということをいつも考えています。でも、本当に地しんが起きて、つなみが私たちにおしよせて来たら、「お父さん、お母さん助けて。」と、こわくてないてしまうと思います。「海は、たくさんの生き物をそだてて多くの人のくらしをささえているだけではなく、人のいのちをうばってしまうこともある。どうしてこんなにこわい海が近くにあるんだろう。いやだな。」と思ってしまうこともあります。

ちょうど一年前の夏、お母さんの大学生のころのお友だちで、大阪に住んでいるいくえさんが、私の住んでいる宮崎に遊びに来てくれました。いくえさんは、自分がびょう気のため、もう長くは生きられないと分かると、「一番に大すきだった宮崎の海と、大すきだった私たち家ぞくのそばですごしたい。」と言ってくれて、体が動くうちに、わざわざむすめさんと来てくれました。いくえさんたちが宮崎にいる間、あちこちたくさんの海を見に行って、しお風やギラギラの太陽の光をたくさん感じました。

そして、いくえさんはすっかり元気になって、夏の終わりには、私たち家ぞくとさらに南の島へ旅行に行くことが出来ました。この時私は「海の力ってすごいな。たくさんのめぐみがあるだけではなく、人も元気にすることが出来る。私も海が大すき。」と思うようになりました。ひとりひとりがいのちをまもり、めぐみをあたえてくれる海と、人をうばう海。どちらの海ともなかよく生きて行かなければなりません。「おーい。おーい。」

いくえさんは今、いくえさんのきぼう通り、大すきだった海に、小さな小さなおほねになってねむっています。

これからは海を見るたびに、しんさいでいのちを落としていまった人たちや、いつもにこにこやさしくて海が大すきだったいくえさんのことを思い出して、自分のいのちは自分でまもって海とともに生きて行きたいと思います。

「おーい。おーい。」この思いがとどくといいな。

（読んだ本・「うみといきる」）

小学校四年生の部　最優秀賞

戦争を知らないぼくら

五十鈴小学校　四年　長友（ながとも）　護（まもる）

学校の図書館でよくかりる本がある。それは、「はだしのゲン」だ。国語のじゅぎょうで、「一つの花」という戦争の物語を読んでから、ぼくはもっと戦争について知りたくなり、この本をかりつづけるようになった。

本を家に持ち帰ると、家族でページをめくりながら読んでいる。話は、太平洋戦争の終わりのころの広島をぶたいにした話だ。

主人公のゲンは、父親が戦争にはんたいしたことで、ひ国みんとしてなかま外れにされ、苦しい日々を送る。そして、八月六日の原子ばくだんを受け、父親と姉、弟を目の前で失ってしまう。ゲンは、生まれたばかりの赤んぼうと母とにげのびるが、それから色々な苦ろうを体験していく。

ぼくは、戦争によるまずしい生活や周りの人から冷たい目で見られるじょうきょう、さらには家族を失うといったかこくなかんきょうの中でも、くじけずに生きぬこうとする主人公のゲンのすがたに心を動かされた。

また、原子ばくだんの開発のきっかけにアインシュタインがいたことにおどろいた。ぼくは、アインシュタインは、原子ばくだんを日本に落とすことで、たくさんの人が死に、ケガで苦しんだり、家族を失ってしまう人が多くでたりすることをそうぞうできていなかったと思う。

広島のひがいを読むと、人間がどんなにおそろしいものを作り出してしまったのかがとても伝わる。こんなものを作り出しては、ぜったいにいけない。

「はだしのゲン」を読んで、ぼくはさらに、戦争を体験している方からも話を聞いてみたいと思った。どんな苦しい思いをしたのか、どんな日じょうをすごしていたのか、原ばくのひがいなど聞いてみたい。戦争を知らないぼくは、戦争について本当に理かいすることはむずかしいかもしれない。しかし、知ることをあきらめたくはない。この本を読ん

で感じたおどろきや悲しみをくり返し次の世代に伝えていきたい。この先の未来、戦争がなくなることはむずかしいと思うが、戦争がない平和な世界を強くねがう。

（読んだ本・「はだしのゲン」）

小学校中学年の部　優秀賞

最後だとわかっていたなら

五十鈴小学校　四年　松本（まつもと）　瑛奈（えな）

令和六年五月二十六日。この日は、私にとって忘れられない日になりました。大好きなおじいちゃんが天国にいってしまったからです。

この本に出会ったのも、火葬場でじいじを待っているときでした。この本を書いたノーマさんは、九・一一同時多発テロで十歳だった息子を亡くし、その悲しみをこの本に綴ったそうです。突然大事な人がいなくなった悲しい気持ちが私と同じで、たくさん涙があふれました。

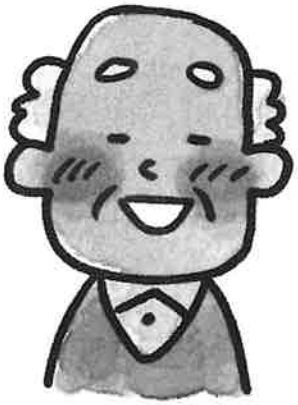
本の中にでてくる詩のなかに、「たしかにいつも明日はやってくる。でももしそれが私のかんちがいで、今日で全てが終わるのだとしたら、私は今日、どんなにあなたを愛してるか伝えたい」という言葉がでてきます。私はこの言葉が一番心に残りました。

突然入院になって、もう帰ってくることはなかったじいじ。じいじとすごせるのが最後だとわかっていたなら、私もきっと大好きを伝えたと思います。ありがとうもたくさん伝えたと思います。たくさん抱っこしてもらって、メダカのお世話の仕方も全部教えてもらって。まだまだじいじと一緒にしたいことがたくさんあったのに、もう全部かなわなくなりました。いつも一緒にいた人がいなくなることはこんなにさみしいんだなと初めて知りました。

この本を読んで、私もそばにいる人たちを大切にしようと感じました。もしも今日が最後だったらと考えながらすごしたら、ケンカの後のごめんねもすなおに言えるような気がします。もっとみんなにやさしくなれるんじゃないかなと思います。大好きな人たちと話ができること、手をつなげること、明日の朝もまた、今日みたいに「おはよう。」が言えること。当たり前に感じていることの一つひとつを大切にしていきたいと思います。

「じいじありがとう。大好きだよ。」

（読んだ本・「最後だとわかっていたなら」）



小学校中学年の部　優良賞

「ライバルおれたちの真剣勝負」を読んで

門川小学校　三年　岩佐（いわさ）　旭（あさひ）

ぼくは、この本を読んで、習っているソフトボールのことを考えました。負けたらどこが悪かったのかを注意されて、勝ったときはみんながほめてくれます。「負けた上におこられるなんてたまらない」と言うリュウの気もちが、ぼくと同じなのでおもしろいと思ってこの本を読みました。

リュウは、小学生名人せんの県代表になるために、父さんと練習をしたりしょうぎの大会に出たり、引っこしをしたりしていました。やっぱりしょうぎでも、代表せん手になろうとするのはとても大変なことだと思います。ぼくの習っているソフトボールは、県代表ではなく、町代表として出場するけれど、やっぱり代表せん手になるのはかんたんではありません。

決められた大会でゆう勝しなければならないリュウとぼくは、しょうぎとソフトボールでちがうきょうぎだけど、勝つか負けるかの世界にいるのは同じ

だと思います。リュウは、マサユキのことを天才だと思っているけど、ぼくはマサユキは頭がいいんだと思います。それにやさしいし、人なつこいところもあります。だけどぼくはリュウの言う天才という言い方は好きではありません。天才なんていないとぼくは思うからです。天才とよばれる人はぜったいにど力をしていてそれにみんなが気づいていないだけだと思います。

向き不向きもあるかもしれないけれど、ほとんどはど力で、天才とよばれる人はど力の人だと思います。そしてリュウはかなりの負けずぎらいだと思います。リュウが心の中で思っていた「父さんなんて大っきらいだ」「少しはおれの好きにさせてくれよ」の二つを、みんなにぶちまけた時、「うわぁ、ついに言ってしまった。この後どうなるんだろう。」と思い、ハラハラしました。よんでいて、リュウとぼくはやっぱりにているなと思い、リュウの味方をしていました。

リュウはマサユキとたたかうときぜったいにげずに正せいどうどうと思いきりたたかいたかったと思います。それがライバルだから。小学生名人せん手県よせん大会の二人の決勝は、まるでぼくがそこにいるような気持でわくわくしました。リュウはマサユキと出会って、父さんともしょうぎともきちんと向き合えたのだと思います。ぼくもソフトボールがいやだと思うときがあるけど、いつの間にかすきになっています。たぶんすきという気持ちでつらいこともがまんできるし、がんばることができるんだと思います。だからがんばった分だけけっかがついてくる。すきになる気持ちが力になるんだと思います。

そして二人のようないい友だち、いいライバルがぼくにもできるといいです。

（読んだ本・「ライバルおれたちの真剣勝負」）

小学校中学年の部　優良賞

「字のないはがき」を読んで

五十鈴小学校　三年　大野（おおの）　由依（ゆい）

この本は、せんそう中の家族のお話です。わたしは、図書館のせんそうの本コーナーでこの本を見つけたとき、学校の図書室にもせんそうの本コーナーがあり、せんそう終結から七十九年がたつとかいてあったのを思い出しました。

そして、少しでもせんそうのことを知りたいと思ったのがきっかけでこの本をえらびました。また、わたしにも妹がいるので、この本の作者の気持ちになって読めそうだとも思いました。

ある日、小さい妹はそかいすることになりました。お母さんは、はだぎをぬい、その一まい一まいに名ふだをぬいつけます。お父さんは、数えきれないほどのはがきを用意して、その一まい一まいにじゅう所と名前を書いて妹にわたします。そして、小さい妹は、遠足に行くようにうれしそうに家を出発しました。

字のないはがきとは、まだ字が書けない妹が、元気があるかないかをそかい先から家族に知らせるために、○と×を使って教えることだったのです。

小さい妹がさいしょに赤えん筆で書いた大きな○はどんどん小さくなって、ある時ついに×になってしまいました。そして、やがてはがきもとどかなくなります。お母さんがそかい先にむかえに行くと、小さな妹はひどいかぜをひいて、せまいふとん部屋にねかされていました。妹を家に連れて帰ってきたとき、お父さんが前よりもっと小さくなった妹をないてだきしめるところが、わたしは一番心に残りました。妹のことをずっと心ぱいしていたお父さんは、妹がひどいかぜをひいたことでもっと心ぱいになったのだろうな、生きていてくれてありがとうという気持ちで妹をないてだきしめたのだろうなということが伝わってきたからです。

わたしは、せんそうがおこってほしくありません。でも、外国ではせんそうがおこっています。学校や病院にもばくだんが落とされ、そこでたくさんの大人や子どもがこわい目にあったり、なくなったりしています。もしも日本がまたせんそうをすると、多くの人がなくなります。そう考えるととてもこわいです。

もしかすると、小さなきっかけでせんそうがおこるのかもしれません。だから、国と国がなかよくして、けんかをしても自分にわるかったところがないかを考えて、なかなおりをできると良いと思います。そして、しんらいかんけいを大事にしていくと良いです。

本のさい後に、「せんそうは終わり、わたしも大人になって小さい妹も大きくなりました。」とありました。わたしは小さい妹が生きていて良かったと思いました。世界中でせんそうがなくなってほしいと思います。

わたしは、この本を読んで「そかい」という言葉を知りました。これからもいろいろな本を読んで、そこで出てくる分からない言葉を調べて物知りになって、みんなをおどろかせたいと思います。

（読んだ本・「字のないはがき」）

小学校五年生の部　最優秀賞

私もりんごの木を植える

門川小学校　五年　黒木（くろき）　恋華（れんげ）

「たとえ明日、世界が滅亡しようとも、今日、私はりんごの木を植える」これは、ドイツの神学者アルティン・ルターの言葉です。私はこの本でこの言葉を知り、死は終わりではないということについて考えさせられました。命はつながり、代々受け継がれていくもの、死がおとずれた後にも、その人の生きた証拠が、たくさん残っていくものだと思います。

ガンにかかったみずほのおじいちゃんは、ガン治療をしないという選択をしました。残された時間をどう生きたいのか、死をむかえるまでの自分の時間を大事に生きたいと考えたからこそ、つらい治療の続く病院よりも、家族と過ごせる自宅を選んだのでしょう。

私には、八十歳をすぎたひいおばあちゃんがいます。みずほのおじいちゃんと同じように、私のひいおばあちゃんにも、数年前にガンが見付かりました。私

のひいおばあちゃんは、ガン治療をするという選択をしました。ひいおばあちゃんが自分らしく生き抜くために考えて出した結論だと思います。治療のために何度も何度も入退院を繰り返していますが、つらい治療を乗りこえて、ひいおばあちゃんに一日でも長く笑顔でいてほしいと私は願っています。

生死と向き合うことは、何歳であっても難しく、簡単に答えを出すことはできないと思います。ガン治療をしないことを選択したおじいちゃんは、ガンになったことをどのように受け入れ、どのように周りに伝え、どのように理解してもらうのか。また、おじいちゃんの選択を、みずほの家族は、どのように受け止め、理解を示すのか、家族それぞれの立場から、おじいちゃんへの思いが見えてくるそんな物語でした。

みずほのおじいちゃんは、「命が終わってもそれで全部終わるわけではないと思う」と話しています。自分の人生の時間は限られていますが、その限られた時間の中で、自分はどのように生きれば幸せなのか、何をすればりんごの木を植えることになるのかを考えなければならないと思いました。

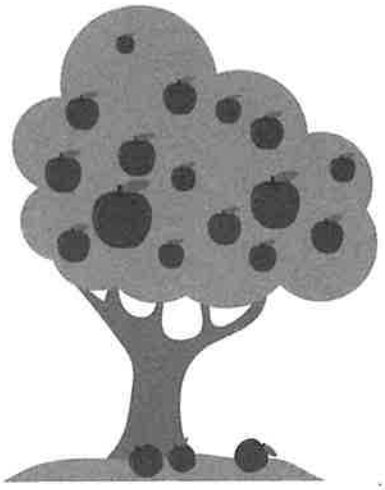
私もみずほのおじいちゃんと同じように、「死は生きることの終わりではない」と思います。死をむかえたその後も、だれかの心の中にその人が生きた証拠が残っていくはずです。人は、一人では産まれず、一人では生きていけません。私が今生きているのは、お母さん、おじいちゃんやおばあちゃん、ひいおじいちゃんやひいおばあちゃんたちがいて、命をつないでくれたからです。さらに、先生や友達、地域の方々など、たくさんの人とのかかわりがあるからこそ、今の私がいます。私にとってのりんごの木が何なのかはまだはっきりとは分かりませんが、りんごの木を植えるということは、次の世代への希望なのかなと思います。出会ったすべての人との関係一つ一つがすべてりんごの木につながっていくのかもしれません。

明日、世界が滅亡すると分かっているならば、りんごの木を植えることは、むだではないかと、みずほは思っていました。しかし、大好きなおじいちゃんの生き方を知り、死と向き合ったことで、おじいちゃんが教えてくれたマルティン・ルターの言葉を思いだし、この物語のその後の人生において、りんごの木を植えることはむだなことではないと考えることでしょう。

明日、世界が滅びる時、私はかけがえのない家族み

んなと一緒にいたいです。代々受け継がれてきた命を私も次の世代へつなぎたいと思います。そのためにも、未来に希望をもち、私とつながっているすべての人との関係を大切にしながら、毎日を明るく元気に過ごしていきたいと思います。そして、いつの日かりんごの木を植えたいと思います。

（読んだ本・「りんごの木を植えて」）



小学校六年生の部　最優秀賞

自然と共に生きる社会へ

草川小学校　六年　田吹（たぶき）　莉央（りお）

脱炭素先行地域を知っていますか。電力を消費する際に出る二酸化炭素の排出量ゼロを地域の特性に応じて実現し、住民の暮らしの質の向上を目指す取組のことです。私の父の出身地である一ケ岡地域は、脱炭素先行地域に指定されました。これは、全国で百箇所しか選ばれないそうです。父や母に脱炭素の説明をしてもらって地球温暖化防止につながる取組であることは分かったものの、よく理解できなかったので、自分なりに調べてみることにしました。

まず、「なぜ、石炭や石油、天然ガスなどの化石燃料ではいけないのか」ということに疑問をもちました。幅広い用とに使える化石燃料ですが、読み進めていくと日本には資源がほとんどないため、中東などからの輸入に頼っていることが分かりました。そのため、国際的な燃料の価格変動のえいきょうを受けやすくなることを知りました。だから、母がいつも「ガ

ソリンが高いな。遠出ができにくくなっちゃうね。」と言っているんだなと思いました。また、資源には限りがあるため、いずれはなくなる可能性があることを知り、これまでの生活が当たり前ではなくなるのかもしれないと不安になりました。その上、化石燃料を使うと、二酸化炭素や硫黄酸化物といった物質が排出され、環境問題の原因になっていることが分かり、他のエネルギーに頼る必要があると考えました。

次に、どのようなエネルギーがあるのだろうということに興味をもちました。化石燃料は使った分だけ減少しますが、常に存在する太陽や風の力を利用したエネルギーがあることを知りました。それを再生可能エネルギーというそうです。再生可能エネルギーには、太陽の光を電気エネルギーに変える太陽光発電、風の運動エネルギーによって風車を回して発電させる風力発電、雨や雪を利用した水力発電、生き物のフンや尿などを利用したバイオマスエネルギー、波の運動エネルギーを利用した波力発電、海洋の温度差を利用した海洋温度差発電があります。しかし、再生可能エネルギーの多くは天気に左右されやすいという問題もあります。その問題を解決するために、エネルギーをためておいて必要な時に利用する揚力発電があることを知りました。また、身の回りの小さなエネルギーを発電に利用する環境発電という考え方もあることも分かりました。

この本を読んで、私なりに門川町で使用する再生可能エネルギーや環境発電の活用場面を四つ考えてみました。

一つ目は、みんなが集まる施設の床や駅などの階段に発電パネルを設置することです。お店の出入り口や通路を人が通った時にふむだけで、電気をつくることができるため、環境にやさしい発電が可能になります。

二つ目は、遊ぶと発電する遊具です。例えば、ブランコをこげばこぐほど発電したり、すべり台をすべるまさつの力を利用して発電したりします。発電量を数字で表すことで、楽しみながら発電することができます。

三つ目は、風の力を利用し、こいのぼりで発電するものです。こいのぼりが動くたびに発電するので、見ながら楽しむことができるため、門川町の観光地にもなると思います。

四つ目は、音で発電するかべです。カラオケ店や学校の音楽室に使用すれば、歌ったときのしん動を利用して発電することができます。

このように、化石燃料に頼った現代社会から、再生可能エネルギーや環境発電を使った自然と共に生きる社会を目指していかなければならないのだと強く感じました。

みなさんも、脱炭素を意識して、環境にやさしい取組を調べてみてはいかがですか。

（読んだ本・「エネルギーって何だろう？持続可能な地球のために考えよう」）

小学校高学年の部　優秀賞

つなみてんでんこ

五十鈴小学校　六年　黒木（くろき）　愛（まな）

今年の初めに能登半島地しんが発生し、倒壊した建物や津波により多くの人がけがをしたり亡くなったりしました。能登半島の他の地域でも、今年は地しんがよく発生しています。私は、いつ起こるか分からない地しんや津波に備えて、いつもお母さんと発生した時の行動の仕方や避難場所についての話をしています。だから図書室で、「つなみてんでんこ」という本を見つけて、どんなことが書かれているのだろうと興味をもちました。

この本は、私たちが生まれる前に起きた二〇一一年三月一一日の東日本大しん災のことについて書かれています。

中学生が、大声で多くの人に避難を呼びかけたり、小学生や保育園などの小さな子をおんぶしたりして自分たちの命を守る行動をしました。

私は来年中学生になります。同じようなことが起

きた時に、私は、この中学生と同じような行動ができるのかなと思いました。

「にげろー。津波が来るぞー。」

「自分の命は自分で守れ。」

「走るんだ、上へ。もっと上の方へ。」

本を読んでいるうちに、だんだん恐怖を感じ、読み続けることが怖くなりました。

真っ黒い波が押し寄せて、家や建物が押し流されていく。

私はそんな光景を実際に見たことはありませんが、社会の授業で、津波が発生し、防波堤を乗り越えてくる映像を見たことがあります。その映像を見た時、実際にその場所にいた人たちのことを考えるととても胸がしめつけられる思いでした。

東日本大震災では、地しん後の避難場所に家族がむかえにこない子、家族が亡くなって大変な子もいたそうです。また、家が流されて帰る家が無くなった子もいたようです。本当に想像もつかないような大変なことがたくさんあったそうです。

私は、今家族もいるし、住んでいる家もあります。毎日学校で授業を受けたり、友達と遊んだり、給食を食べたりという日常を送っています。でも、その普通のことが当たり前ではないこと、とても幸せであることに気付かされました。

私の住んでいる門川町も、すぐ近くに海があります。門川町でとれた魚は、新鮮でとてもおいしいです。夏は海で泳ぐなど楽しいこともたくさんあり、怖いことばかりではありません。海から自然の恵みをもらったり、楽しい思い出をもらったりできて、私は海が大好きです。

私は、今後、地しんや津波が起きた時に迷いなく避難したり、命を守る行動がとれたりできるように学校や地区での避難訓練に真剣に取り組もうと思います。そして、家族がいること、住んでいる家があること、学校に通えていること、全てのことを当たり前と思わず、感謝の気持ちを忘れずに過ごしていきたいと思います。

（読んだ本・「つなみてんでんこはしれ、上へ」）

小学校高学年の部　優良賞

毒に対する考え

五十鈴小学校　五年　當瀬（とうせ）　司隠（しおん）

「ある日、毒をもつ生き物がみじかにひそんでいて、突然自分におそってきたらどうしよう。」

そんな不安な思いから、図書室でぐうぜん出会った本でした。

この本は、題名通りに、毒をもつ生き物についてくわしく書かれていました。

一つ目に、攻撃タイプをもつ生き物がしょうかいされていました。攻撃の方法は、五つの方法があり、咬む、刺す、飛ばす、鎧を作る、食中毒などがありました。ぼくは、その中で食中毒のことが特に気になりました。理由は、食中毒以外は、相手を攻撃したり、いかくをしたりするときに毒を使ったりするからです。一方、食中毒をもつ生き物は、食べた相手にダメージをあたえるので、他の生き物とはあきらかなちがいがあるからです。さらに、くわしく読み進めていくと、補食した後に毒で相手にダメージを与える生き物、捨て身の攻撃作戦がある生き物、一匹が犠牲になり、仲間を守る生き物がいることが書かれていました。そのことを知って、ぼくは、食中毒を使う生き物は、仲間を絶やさないようにしているのかなと思いました。

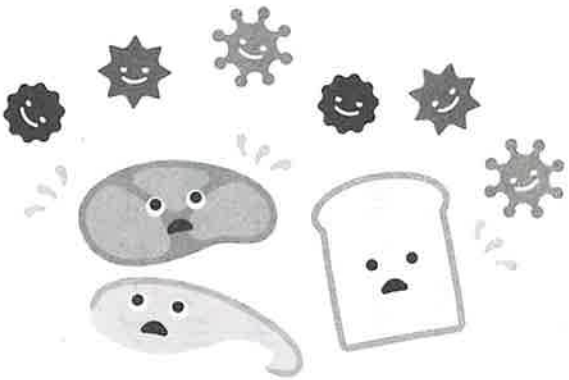
二つ目に、美しい花にも毒があることが書かれていました。ぼくにとっては、花はきれいで親しみやすいイメージがあったので、アサガオやアジサイ、そしてヒガンバナなど、よく見かける花にも毒があると書かれていたので、少しショックを受けました。そのほか、毒の症状には、腹痛、おう吐、下痢、めまいなどがありました。そして、毒をもつ部分は、花全体に毒があることも書かれていました。

三つ目には、人間が作り出した毒というのがのっていました。ぼくにとっては、大変ショッキングな見出しでした。読み進めていくと、洗剤や農薬などがありました。洗剤や農薬は、人間が生活していく上で必要なものだと考えるので納得しました。ただし、使い方をまちがえなければ、安全であることがつけくわえられていました。しかし、残念なことに、殺人や傷害のために作り出された化学兵器や人体の機能に作

用する血液製剤やちっそく剤、さいみん剤などが書かれていました。ぼくは、なぜこのような毒を作るのか理解できません。理由は、人間が人間を殺すような毒があってはならないと強く思うからです。

これらをふまえて、ぼくは二つのことを考えました。一つ目は、毒をもつ生き物にそうぐうしても、けっしてあわてることなく安全に行動したいです。二つ目は、人工的に毒を作ることがないように行動したいです。この感想文もその行動のひとつです。地球に住む生き物が幸せにくらせますように。

（読んだ本・「毒をもつ生き物図鑑」）



小学校高学年の部　優良賞

「こどもＳＤＧｓ」を読んで

門川小学校　六年　長谷川（はせがわ）　晴一（せいいち）

今回、ぼくが選んだ本は「こどもＳＤＧｓ」です。この本の表紙には「このままでは地球があぶない！未来のために考えるべきこと」と書かれてあります。「ＳＤＧｓ」とは、国連が決めた二〇三〇年までに世界の人々が達成しなければならない十七の目標です。二〇三〇年まで、たくさんあると思っていたけれど、なんともう六年しかありません。今年の夏はものすごく暑いです。日向市では最高気温三十八度になったとニュースになっていました。これも地球温暖化で、地球があぶないということのその一つかもしれません。

ぼくは今年十二さいになるので、二〇三〇年には十八さい、成人になります。ぼくが大人になったとき、十七の目標全部達成できているためには、これから一人一人が意識を高めて生活、行動することが大切だと思います。そのために今ぼくができることを

考えていきたいと思います。

ぼくがこの本で知ったことは、ＳＤＧｓで「五つのＰ」があるということです。まず一つ目は、ピープル（人間）のＰ。二つ目はプロスペリティ（豊かさ）。三つ目はプラネット（地球）。四つ目はピース（平和）。五つ目はパートナーシップがあります。この五つの中でぼくは、プラネット（地球）が一番大切と思います。なぜかというと、地球の環境がどんどんおかしくなっているからです。このままでは、地球の気温は二一〇〇年までに、最大四・八度上がってしまうそうです。毎日四十度を超える日があたりまえになってしまうかもしれません。今年のプールの時、ぼくは、プールサイドを歩くとき、地面が熱すぎて足がいたくなったことがありました。もしかしたら近い将来、外で体育ができなくなってしまうかもしれません。地球温暖化が進むと、農作物が獲れなくなり、きがが増えるかもしれません。この本には、水不足が進むと、もしかしたら、水という資源をめぐって戦争が起こるかもしれないと書いてありました。

だからぼくは、環境を守るために、自分ができることを考えてみました。まず、昼間は電気をつけないということです。なぜなら、カーテンを開けたら、日光が部屋に入って部屋が明るくなるからです。次に、水を出したままにしないことです。なぜならぼくは、顔を洗うときなどに出しっぱなしにしているからです。ふだんの行動を見直すことで、できることがもっと見つかります。行動を変えることで、未来が変わります。ちょっとでもＳＤＧｓに貢献することが大事です。

この本を読んでたくさんのことを知りました。これからぼくは、ＳＤＧｓに協力して生きていきたいです。これまで、たくさんの無駄をしてきたので、この本を読んで学んだことをこれからの人生にたくさん活かしていきたいです。そして、考動を目標としてがんばっていきたいです。そしてまた、友達や家族にもいろいろなことを大切にしてもらえるように、声かけをしていきたいです。

ＳＤＧｓで大事なことを少しずつでも広めていきたいです。

（読んだ本・「こどもＳＤＧｓ」）

中学校の部

中学校の部　最優秀賞

今、未来を変えるために

門川中学校　二年　水永（みずなが）　央華（おうか）

私は今回、読書感想文を書くにあたり「カラフル」という小説を読んだ。この本は初めて読むものではなく、小学六年生の時に一度読了していたものだ。今年の読書感想文で何を題材にするかと考えた際、二年前に読んだこの本を読み返せば、何か新たな気付きが得られるのではないかと思ったからだ。

小説のあらすじは、一度死んだ男が、ある仮死状態の中学生の体を借り、前世の罪を償っていくといった内容だ。ある中学生が仮死に陥った原因が、この話の核心となっている。中学生の両親は、突然生き返った我が子に驚きつつも泣いて喜んだ。周りの人もみな、同じように喜んだことから、男は「悪くない」と思った。だが、中学生の体で日々を過ごすうちある事に気付く。「息苦しい」「生き辛い」「居場所がない」生活が辛くなった頃、更に辛いことが重なり、男の絶望感に拍車をかけた。ここで、一度考えてみてほしい。

この世で最も大きく重い罪とは何か。それぞれ解釈があると思うが、今回読んだ作中では自ら自分の命を奪うこと、つまり「自殺」が一番の罪とされている。男が生前犯した罪は自殺だった。そして男が借りた体の主は、自殺により仮死状態に陥った、前世の自分自身だったのだ。この小説のなかでは、男は自分に希望を与えてくれる人物に出会い、人と向き合い自ら生きるという決断をする。だが、現実世界に生きる私たちは、この小説の主人公のように一度生き返ってやり直すことはできない。

近頃はテレビのニュースでも新聞の記事でも、悲しいことによく中高生をはじめとした多くの人々の自殺が報道されている。その背景には友人間でのいじめであったり、家庭環境の問題、人には打ち明けられない悩みを抱えていたりと、様々な「理由」がある。きっとその辛さは本人にしか分からないような、想像を絶せるものだと思う。だが、そんな辛く苦しい状況にあっても絶対に命を絶つなんてしてほしくない。掛け替えのない、たった一つの大切な命。

そこには自分だけでなく、これまで関わってきた沢山の人達の「生きてほしい」という願いが込められ

ている。だからどうにか希望を見つけて生きてほしいと思う。そのためには、苦しい状況にある人々の現状を把握し、寄り添ってあげられるような、そんな社会的な協力の風潮が必要である。

またそれ以前に、苦しめる原因となっているいじめなどを根本から排除しなければならないというのも、今社会で改善すべき課題といえる。今回考えた課題は、様々な社会問題の一つにすぎない。

だが、その小さな一つ一つをしっかり見つめることはとても大事なことだ。「社会の課題」というと、私たちに出来ることがあるのか、何ができるのか、分からない人も多いかもしれない。決して大きな行動を起こす必要はない。周りの人と向き合い、しっかり話を聞く。相手のことを考えた言葉遣いを心がける。このような小さな行動でも、きっと未来は変えられるはずだ。

一つの小説から、今見つめるべき課題と私たちができることを見いだすことができた。次は是非あなた自身が、本書を読んで考えてみてほしい。

「カラフル」という表題の真意とは何か、今私たちにできる最大のことは何なのか。

（読んだ本・「カラフル」）

中学校の部　優秀賞

生きること

門川中学校　三年　山内（やまうち）　心陽（こはる）

幸せに生きるとはどういうことだろう。長生きすることは幸せで長生きできないとかわいそうなのだろうか。「こどもホスピスの奇跡」。この本は、「生」について私に深く考える機会を与えてくれた。

私の将来の夢は医者である。目指し始めたきっかけは分からないが、小学校低学年の頃から追い続けてきた夢だ。きっと「人の命を助ける」という姿に強い憧れを抱いていたのだろう。今の私が目指す医者の姿は、病気で苦しむ人の苦痛やその人を支える人々の不安を少しでも和らげることのできる優しい人だ。

この本には、小児がんと闘う子供たちとそれに寄

り添う人々の物語が描かれている。もし、自分の子が小児がんと診断され、余命宣告されたら私はどうするのだろうか。最後まで諦めずに治してほしいと頼むだろうか。それとも諦めて、治療をやめるだろうか。この本を読む前の私は前者だった。なぜなら、今まであたり前にいた大切な存在を失うという苦しみや悲しみに自分が耐えられそうにないからだ。また、まだ死にたくないだろう。こんなに頑張ってきたのに諦めるのは悔しいだろう。かわいそうだといった同情の気持ちもある。しかし、それは本当に両者の幸せにつながるのだろうか。

この本を読んで私の考えは変わりつつある。この本には小児がんで亡くなった子供たちの話が出てくる。この部分を読んだとき、私は胸が締めつけられるような思いがするのと同時に心を打たれた。ある親子が余命宣告をされたのにも関わらず、幸せそうだったからである。その子の両親は余命宣告された時、治療をやめて、思い出づくりをしていくと言った。

そして、たくさんテーマパークなどに遊びに行き、たくさんの思い出を作った。その子が亡くなった時両親は「一生の思い出になった。短かったが良い人生だったのではないか」と言い、不思議と晴れ晴れとした表情で我が子の死を受け入れていた。こんな選択もあるのだと私は衝撃を受けた。医者は、病気を完治させること、一日でも長く延命させることだけが使命ではなかった。このように、少しでも人生を豊かにすることを手伝うのも医者の使命だと感じた。

もちろん、延命治療をするという選択もある。しかし、それは、苦しい時間を引き延ばす行為でもある。残された時間が短くとも、その時間でどれだけ思い出を作り、人生を豊かにできるか。それが幸せにつながると感じた。余命宣告は幸せの終わりではない。悔いの残らないよう人生を送ること、送らせてあげることで想像を絶するほどの辛い死を、少しでも楽しかった思い出や幸せに変えることができるのではないだろうか。いつ死は訪れるか分からない。だからこそ「今」を大切にして生きていかなくてはいけない。

この本を通して自分自身の生き方についても考えることができた。「短くとも深く生きる」これは帯表紙に記されている言葉だ。私はこの言葉を胸に刻んだ。決して長生きできないことは不幸ではなかった。短くてもその中にはその人達の大切な思い出や

人生がたくさんつまっている。前述したとおり、私の将来の夢は医者だ。たくさんの人の病気を治す人になりたいと思っている。

しかし、ただ病気を治すだけではいけないと感じた。私は病気で苦しむ人、支える人々の不安や苦痛を和らげ、人生を豊かにするお手伝いができる優しい医者になりたいと思った。病気と闘う人々を「幸せ」に導けるような人になりたい。

（読んだ本・「こどもホスピスの奇跡」）

中学校の部　優良賞

毎日の幸せ

門川中学校　三年　河野（かわの）　柚花（ゆずか）

みなさんは、やり直したいことはありますか。そして自分にとっての幸せとはなにか考えたことはありますか。

この本は、四年生の奈ノ花が三人の女性たちと不思議な出会いをする物語です。授業で幸せについて考えることになった奈ノ花は、答えを見つけるために色々な人の所をめぐっていきます。

物語が進むにつれて、たくさんの小さな幸せについて見つけていきます。　私も、この本を読み、幸せについて考えてみました。

おいしいお菓子を食べるとき、欲しい物が買えたとき、焼き肉を食べるとき、友達と話しているときとたくさん浮かんできました。幸せは、日常の中にたくさん潜んでいることが分かりました。だけど「一番幸せなこと」は何か、考えてみるとそれはよく分かりませんでした。小さな幸せはたくさん見つかるけれど、

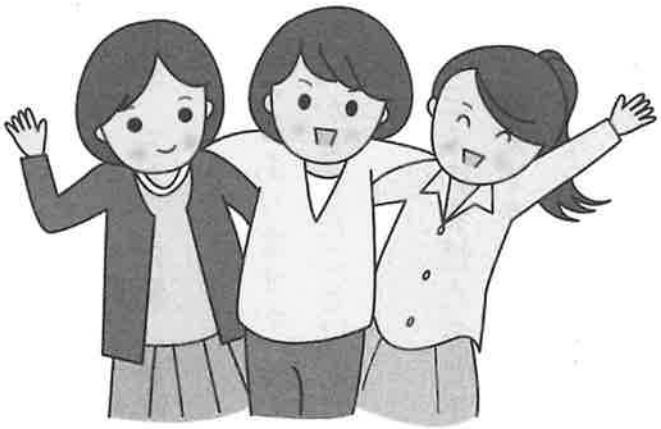
一番にしっくりくるものはありませんでした。それから、未来の自分が目の前に現れたらどうしますか。私は、おそらく気付かず仲良くなると思います。そしてこの物語の子と同じように相談したり、ゲームを一緒にしたりして楽しむと思います。私には、このようなことが起こったことはないけれど、自分より年上の人は、私より幸せについてよく知っているような気がします。それに、未来の自分といったら、さらに自分のことを理解していて、幸せについても知っていると思います。

この本で特徴的なのは、奈ノ花の口癖の「人生とは……みたいなものよ。」という例えです。様々な例えがある中で一番好きなものは「人生って、かき氷みたいなもの」です。この言葉には、たくさんの好きな味があるのに、全てを食べることはできない。それはお腹を壊してしまうからという意味が込められています。たしかに、好きなものだけを欲張ると上手くいかないことが多いです。いつもは一番好きな味を食べ、たまに違う味も食べてみる。

この例えは本当に人生のことを表しているなと思いました。この本には、奈ノ花が見つけた幸せは出てこなかったけれど、物語に出てくる人の幸せとは、という答えがたくさん書いてあります。どれも納得でき、よく考えさせられる言葉だったけれど、私の幸せかと言われたら、少し違う気がしました。

私は物語に出てくる人たちのように、自分の幸せを見つけられる人になりたいです。幸せとはまだよく分からないけれど、私の長い人生を通して、私なりの幸せを見つけていこうと思います。

（読んだ本・「また同じ夢を見ていた」）



中学校の部　優良賞

恐ろしい魔女の正体は

門川中学校　三年　松田（まつだ）　優那（ゆな）

私は梨木果歩さんの「西の魔女が死人だ」という小説を読みました。この本を選んだきっかけは、小説の題名を見たときどんなお話なのだろうと疑問に思ったことでした。

この題名にあるように西の魔女と聞くと、呪文を言いながら、枝を振り回したりほうきに乗ったり、鍋でグツグツと何かを煮込む姿を想像しますが、ここでの魔女は主人公のまいの、優しく愛情深い祖母のことでした。

この物語は、自分の気持ちをうまくコントロールできなくなり、不登校になってしまった中学一年生のまいが親と離れて祖母と二人で一カ月程、田舎の自然で暮らしていくなかで自分の気持ちを整理する力を身につけて成長していくお話です。私はこの物語で三つのことが心に残りました。

一つ目は、まいに祖母が魔女修行を始めるときのことです。まいが想像していた修行とは違って、早起きをすること、運動をすること、食事をしっかり摂ることなど当たり前のことばかりでした。そして祖母はまいにこれからのことを成し遂げるのに一番大切なのは「意思の力、自分で決める力、自分で決めたことをやり遂げる力」だと教えて、まいが転校することになったとき、父に自分で学校を決めたいと言った場面は、まいの成長を感じました。そして祖母の言葉は私にも響きました。

私は自分で決めて動くことが苦手です。もし計画を立てられたとしても、この計画はめんどくさいから明日でいいやと後回しにすることが多いので、結局、自分に言い訳をして最後までやり遂げることはなかなかありません。そんな自分を変えたいと思っているときにこの祖母の言葉に出会いました。

二つ目は、「自分が楽に生きられる場所を求めたからといって、後ろめたく思うことは必要はありませんよ。サボテンは水の中に生える必要はないし蓮の花は空中では咲かない。シロクマがハワイより北極で生きるほうを選んだからといって、誰がシロクマを責めますか。」世の中は逃げたらだめだという風潮

があるけれど、祖母の言葉で、そうする必要はないと心が軽くなりました。自分らしく生きられる場所を見つけられたらそこで頑張ればいいもだと思えました。

三つ目は、まいが祖母に「死」について聞いたときのことです。まいが父に、人は死んだらどうなるのかと聞いたとき、自分というものは無くなると聞いて傷ついていましたが、祖母の考えとは少し違っていました。人には魂があり、人は身体と魂が合わさってできていて、死んだら身体は無くなってしまうが、魂はこの先も長い旅を続けて生き続けてくれると祖母が話していました。

私はまいの父と同じように、死んだらもう終わりという考えをもっていたので、祖母の考え方は新鮮に感じました。私の、「死」に対する恐怖というものが少しうすらいだ気がします。 私はこの本から多くのことを学びました。まいは祖母の修行によって、自分の気持ちをコントロールするということができるようになり、学校に行けるようになりました。

同時に、私もこの物語を読んで、何かが変わった気がしました。幸せはその人によって違うので、何が自分を幸せにするのか探していかなければいけません。一番大事なことは自分で見つける、聞こうとする意思の力。そして自ら考え行動する、考慮する力。このシンプルな行動が心身を鍛えるということが、今の私には必要なことだと気づかせてくれました。

まいとの生活を祖母は魔女修行と呼んでいたけれど、本当は大人になるための訓練だったのではないかと思います。 後悔の少ない人生を送るには自分にも他人にも素直にいきていくことが大切だと感じました。他人に尊敬される人生を送り、嫌味ではなく、啓発できるような言葉をかけられる、そんな人を目指したいです。

（読んだ本・「西の魔女が死んだ」）

読書感想文コンクール　佳作受賞者

小学校低学年の部

草川小学校	一年	後藤	蒼依
門川小学校	二年	松下	柚姫

小学校中学年の部

草川小学校	三年	黒木	乃々椛
門川小学校	四年	合場	ことね

小学校高学年の部

門川小学校	六年	奈須	興次朗
五十鈴小学校	六年	横山	ゆめ

中学校の部

門川中学校	一年	山野内	瞬
門川中学校	三年	佐藤	菜央

読書感想文コンクール　審査委員

審査委員長

五十鈴小学校　校長　藤川　貴司　先生

審査委員

門川小学校	布井　あい	先生
草川小学校	重黒木　志歩	先生
五十鈴小学校	中谷　佳代	先生
門川中学校	後藤　真理子	先生
門川中学校	田口　敬汰	先生

あとがき

本年度で第四十二回を数える「門川町読書感想文コンクール」に、今年も多くのみなさんが応募してくれました。

本年度の作品応募総数は、八三五点（小学校六一二点、中学校二二三点）でした。読書離れが叫ばれる中において、門川町内の子ども達の読書感想文に対する関心の高さに驚くとともに大変うれしく思いました。

各学校での一次審査を経て出品された作品は四五点（小学校三五点、中学校一〇点）で、いずれも書き手の思いの詰まった力作揃いでした。それら一点一点を二次審査として審査員一同、慎重に読み進めた結果、小学校は、低・中・高学年部より、それぞれ最優秀賞二点（各学年一点）、優秀賞一点、優良賞二点、佳作二点、中学校は、最優秀賞一点、優秀賞一点、優良賞二点、佳作二点の計二十七点の作品を選考させていただきました。

読書感想文は「面白かった」「感動した」といったコメントの列挙ではありません。入賞した作品には、感想はもちろん、「自分自身の経験や思い」や「これからの決意」等がふんだんに詰まっており、審査員一同、審査には大変苦労しました。

今回、審査にあたられた先生方の感想を紹介します。

「読み物（絵本や小説など）だけでなく、科学や理科等の本も入っていて、幅広い内容で応募があった。」「自分が経験したことや、その中で感じたことと本の内容とを重ね合わせることがよくできている作品が多かった。」「本の内容をとらえて、自分と関わらせたり考えを広げたりといった作品が多かった。」「学年に関係なく、自分の考えをしっかりと書けている人が多かった。」「小学生は字もしっかり丁寧に書き、本の内容をしっかりと読み込んでいた。中学生は学年が上がるにつれ、文章の構成がしっかりとなされていた。」

「あなたが絶対に知るべき唯一のものとは、図書館の場所である。」と言ったのは、誰もが知るアインシュタインです。

門川町では、読書活動の推進を重点の施策として、「門川町の子どもたちに読ませたい図書百冊」の選定など様々な取組を行っています。現在読書離れが大きな社会問題となっておりますが、本町の児童・生徒には是非とも図書館や図書室に通い、様々な本との出会いを通して、心豊かに成長してくれることを心から願っております。

令和六年十一月

審査委員長　門川町立五十鈴小学校　校長　藤川　貴司